

小田実全集（評論 第29巻）

戦争か、平和か
「9月11日」以後の世界を考える



講談社
小田実全集
Makoto Oda

目次

はじめに

8

1 現代の戦争を考える

14

アメリカ合州国という名の「関東軍」／アメリカ合州国Ⅱ「関東軍」に
追従、追認／軍隊が中心にある社会／「戦争主義」と「平和主義」／新し
い戦争を考える／「一極構造」のなかの「アメリカ民主主義帝国」／「二十
世紀」の戦争／「現代の民主主義国家」の軍隊／古代アテナイの直接民主
主義Ⅱデモクラティア／「市民国家」の強大な軍隊

2 古代アテナイの「民主主義」

44

ソクラテスの裁判／最終の決定権をもった「市民集会」／民主主義の政治
は「ことば」の政治／「ことば」を使うことの目的は「説得」／「市民軍隊」の
「市民兵士」の誓い

3 しかし、「軍隊」とは何か

58

「殺し合う集団」としての軍隊／戦争に正義はあるか／「殺す」としての軍隊

4 民主主義と「平和主義」の車の両輪

戦後の私たちの二つの誤解／民主主義と「平和主義」の車の両輪／ベトナム戦争は何んであったか／やるべき戦争、「正義の戦争」はある——パウエルの主張

70

5 「九月一日」以後の世界

「八月十五日」と「九月一日」／奇襲攻撃と「自爆攻撃」／体験としての大阪大空襲／一九四五年八月一日の大空襲／たいていの戦争は「戦争のための戦争」だ

87

6 「難死の思想」から

ベトナム反戦運動から／「被害者」＝「加害者」となる

115

7 生き方の原理としての「平和主義」

「世界平和宣言」としての「平和憲法」／「平和主義」を基本とした「平和憲法」／「良心的兵役拒否者」の思想と実践／「平和主義」の実践としての「良心的軍事拒否国家」／「東洋のスイス」としての日本人の夢／「戸じまり」再軍備論の破綻／「核の傘」の抑止力を無邪気に信じる人たち／テロリストに対する「正義の戦争」はあるのか

127

8 世界は混迷におち入っている

それは破滅でないのか／日本の市民が世界に「平和主義」を推し進める／
安保ではなく「平和友好条約」を／「良心的軍事拒否国家」としての「平和力」

163

9 「良心的軍事拒否国家」に日本の未来を見定める

「阪神・淡路大震災」で見えて来たこと／「軍拡」を抑えて「軍縮」を／
市民がつくる「市民の軍縮」計画／「良心的軍事拒否国家」に日本の未来
を見定める

187

10 「国民」と「市民」

私の「愛国心」、アメリカ合州国との「つきあい」／「市民」とは何か、誰
か／「国民」と「市民」／「われら」と「われ」われ……

200

11 「殺す」側と「殺される」側

「歴戦の弱者」としての「平和主義者」／「殺してはならない」ではなく
「殺されてはならない」／「する」側ではなく「される」側から考える／国
家犯罪がひき起こしたゆがみの歴史／二つの妄念、そして、諸君、自分で
考えてくれたまえ

219

戦争か、平和か

—— 「九月二一日」以後の世界を考える

はじめに

今よく論議されているのは、有事法制です。この平和な時代になぜ有事法制というようなものをつくろうとするのかが前提にあつて、平和な時代にこそ必要なんだ、という人もいれば、平和な時代に静かな海に波をたてるようなことをなぜするんだ、という人もいます。新聞にもそういう二つの態度が出ている、テレビジョンも同じだ。

私は、その前提がまちがっていると 생각합니다。

今の問題は、日本の中だけを見ていては判らないが全世界を見れば、有事の時代が来ている。平和の反対の有事、だから有事立法です。平和な時代ではもうないんだ、という認識を前提として、他の世界を眺めないと、今の事態は判らないと思う。有事というのはおいしいことばで、ほんとうは「戦時」です。「有事立法」じゃない、まさに「戦時立法」です。

有事をつくり出したのは、アメリカ合州国です。これは、歴然としてある事実で、これを忘れてはいけません。ここからすべてが出発します。アメリカ合州国があちこちで有事をつくり出した。一番いい例が、アフガニスタンでの戦争です。

今アフガニスタンではアメリカ合州国の強力な支持の下で、アメリカ合州国の「カイライ政権」と言っても決して過言でない暫定政権ができあがったけれども、アフガニスタンの有事がすんだら、次はイラク。そこでの有事戦争を起こしてイラクを変えるんだということを強力にやろうとしている。

何が起るかわからない。

それからもうひとつ、今起こっている有事の大きな問題は、パレスチナ。

パレスチナ人の闘争——解放闘争を武力で弾圧する。戦争をする。これが有事です。アメリカの強力なうしろ楯でイスラエルが強力に有事をつくり出している。

現在の事態の引き金を引いたのは、昨年（二〇〇一年）九月一日の、「同時多発テロ」と今言われているニューヨークの「世界貿易センタービル」への旅客機を奪つての自爆攻撃などの「イスラム過激派」（この言い方が、いまだに正体がよく判らない実行者に対する総称としてもつとも適切だと私は思う）の軍事行動です。しかし、その事態を「報復戦争」の名の下にアフガニスタンに持つて行って、大きな戦争に拡大して、世界中に有事をつくり出しているのはアメリカ合州国です。

ほんとうは、あの最初の自爆攻撃の有事を大きな有事に変えなくて収拾できた。しかし、アメリカ合州国はその機会を逃さず、戦争という大きな有事に変えて、拡大した。だから、これはあくまで「アメリカの有事」です。このアメリカ合州国がつくり出した有事に対して、今、世界がオタオタしながらついて行っている。これが今日の世界のさまです。

そのオタオタしながらついて行っているなかの最先鋒が、日本です。日本はその有事になんとかして即応し、対応し、ついに行かため、まず、「周辺事態」に対応する法律をつくった。これは「九月一日」のまえでしたが、今は、より完全にアメリカについて有事法制をつくり出そうとしている。では、日本はどうすればよかったのか。私は「九月一日」の事件のあと二つの文章を書いています。ひとつはあとで引用するまさにその直後に書いた「日本の市民として考える」ですが、もうひとつは

少し日数をおいて書いた次の『同盟国』日本が今文明から求められていること」と題した次の一文です。

無関係、無防備の市民が乗る旅客機を乗っ取り、無関係、無防備の市民が働く建物に自爆攻撃をかけて旅客機、建物双方の数千人の市民の生命を奪うようなことは、もちろん許しがたい野蛮な犯罪行為だ。行為の主謀者に「法」の裁きを受けさせ、責任をとらせることは、彼らの犯罪の犠牲になつた市民を悼み、残された家族などをできるかぎり支援することともに、今、当事者のアメリカ合州国のみならず、世界全体が助け合つてなすべきことであるにちがいない。ことを少し大きくして言えば、これは今野蛮の攻撃、挑戦を受けた文明が当然なすべきことだ。

しかし、今、この野蛮に対して戦争によつて「報復」する——これははたして文明がなすべきことか。文明の名に値する行為であるのか。大いに疑問だ。

世界の文明が未発達、野蛮の時代にあつては、犯罪者の無法、不法に対する唯一の方策は「報復」であつたに違いない。「報復」しか無法、不法を糾^{ただ}す術はなかつたのだ。殴るなら、殴り返せ。盗めば、盗み返せ。あるいは、盗みを働いた人間の手を切れ。殺せば、殺し返せ。もちろん、殺されれば、被害者はこの世にいない。では、家族、親族、仲間がカタキ打ちで死者になり代わつて「報復」をやる。やれ。これはつい百年余の昔まで日本でも論理、倫理になつた行為として行われて来たことだ。

文明は、こうした「報復」をただの仕返ししの「私刑」として否定することから始まる。仕返ししの「私刑」は仕返ししの「私刑」を生み、「報復」はおたがいのあいだで無限につづく——その根本認識に

立つて、文明はこの無限、また個別の連続にとどめをきそうとする。なるほど力によって、一時的には無限連続を押しえ込むことはできる。一方が他方の仕返しを許さないほど強大である場合だが、その一方の強大がいつまでつづくかは判らない。文明はその認識の上に立つて、力によってではなく人間の理性に基づいて、理性がかたちづくる「法」を基本とする普遍の場の問題を引き出し、「報復」の無限、個別の連続を断ち切ろうとする。もちろん、その理想が完全に実現することはないだろう。しかし、その理想にむかって努力する——その努力に文明は自らの土台をおく。そこで野蛮と切れる。

私が今度の「事件」に対するブッシュ大統領以下のアメリカ合州国政府の対応にかかわっておどろくのは、そして、深く憂慮するのは、彼らが何ごとにつけ「報復」の論理、倫理を居丈高にふりかざして来たことだ。その究極が「報復戦争」だが、彼らの言辞を聞いていると、まるで中世、いやもつと昔、文明以前の野蛮の時代に立ち戻った気さえする。近代の戦争にあつて、これほどあからさまに正々堂々と「報復」を戦争の理由づけに押し出した戦争はないにちがいない。日本の「日中戦争」は「東洋平和」のための戦争、アメリカの「ベトナム戦争」は「自由と民主主義」のための戦争だった。どちらもがマヤカシだったが、すくなくとも二つは「理想」をかかげての戦争だった。しかし、アメリカが今行おうとしているのは、ただの「報復戦争」——これはアメリカにとつただけでなく世界全体にとつても前代未聞の事態だ。

もちろん、この戦争によって「事件」の首謀者たちを捕らえ、「法」の裁きに服させると、大統領以下は主張している。しかし、「報復」を前提とする裁きは、ただの「報復裁判」ではあつても

文明がその前提とする公正な裁きではない。結果は予想がつく。その裁判の根拠となる主謀の証拠にはそもそもいかなるものがあるのか。この国際的犯罪をいかなる「法」的根拠に基づいて裁こうとするのか。ことは何も国際的には決まっていない。決まっているのは、アメリカが強引に「報復」のための戦争をする、そこに世界をひきずり込もうとしている——ただ、それだけだ。

アメリカとのつきあいの長い（四十三年前の留学以来だ）、友人知己も多い私には、これまでの歴史で「外敵」からの直接攻撃を受けたことがなかったアメリカは、今冷静さを失って一種のパニック状態、あえて言えば「狂気」のなかにあるようにさえ見える。疑わしい国には攻撃をかけると言いつつ、この戦争に全面的に協力するか否かでこれまでの「同盟国」が真の「同盟国」かどうか決まるとおどしをかける。これでは「同盟国」はアメリカの「属国」になれ、なるかどうかで「同盟国」であるかどうかきまる、いや、そうアメリカが決める——と言っているのと同じだ。

今度の「事件」ではじめて逆境に立ったアメリカを、「同盟国」か否かにかかわらず世界は助けるべきだ。しかし、アメリカの「属国」になって「報復戦争」の「狂気」に加わるのではなく、自らの原理と方法に基づいて助ける——それがアメリカの「同盟国」日本が今文明から求められていることだ。

（『毎日新聞』二〇〇一年九月一八日）

しかし、日本はこの『同盟国』日本が今文明から求められていること」をしませんでした。代りに、ただ、今や「文明」に反する戦争を無限定に行なおうとするアメリカ合州国にただ追従し、今、一層

協力、追隨するための法制度の整備を今アメリカに強請されて行なおうとしている。これが「有事立法」という名の一連の法律づくりです。だから、政府の答弁の論調が支離滅裂なのです。何が有事であるかということも説明できていないのだからひどいものだ。しかし、それでもやみくもにも「有事法制」は実現されなければならない。これができれば、日本は完全にアメリカの「属国」になります。

ヨーロッパ諸国は異論があつてなかなか「属国」になろうとしない。アメリカの一番忠実な部下が、戦後の歴史のなかでまちがはなく日本だったので、「九月一日」以後、日本ではさらに完全にアメリカにつき従い、支える体制ができあがりつつある。「有事法制」が完全にできあがれば、アメリカはそれに乗っかって、いくらでも有事の拡大ができる。その認識をまず私たちはもつべきです。

1 現代の戦争を考える

アメリカ合州国という名の「関東軍」

私がかここで思い出すのは、かつて日本には「関東軍」というものがあつたことです。日本帝国陸軍の一部としてあつた軍隊ですが、これがどれだけ日本を破滅に導く大きな役割を果たしたかということ、私はここであらためて想起します。

「関東軍」は、中国東北部——当時の呼び方で言えば「満州」に駐在していた日本の軍隊です。日本は歴史的に、日清戦争によつて、朝鮮での支配権を確立する第一歩を踏み出したあと、日露戦争によつて、朝鮮の植民地化を達成します。

その上でさらに中国の東北地方の支配に乗り出す。

まだ中国東北地方の領土全体を支配していないのだけれども、日露戦争の勝利で権益のひとつとして、南満州鉄道、よく満鉄という言葉でいわれる鉄道がありますが、それを獲得する。また、同時に、旅順、大連を租借地として手に入れる。それらの権益を護る軍隊として、日本帝国陸軍は、軍隊を派遣することができた。しかし、これは東北地方全体を支配する軍隊ではなかつた。そういう一定の地域だけに限り護る、その大義名分の下におかれた軍隊——これが「関東軍」です。

ところがその軍隊が勝手に活動をはじめた。東北地方全体の支配をもくろんで、それはのちに「満州国」独立の形で実現するのですが、このあとはもう「関東軍」のワク組みをこえた日本全体の動きになる、中国の東北地方の支配が実現したあとも、今度は中国全体を支配しようとして、日中戦争に入って行つた。さらには日中戦争で足りないとおつて、アジア全土、太平洋地域まで広がって、アメリカと大戦争をする。そして敗戦です。

われわれが負けると、満州全体を支配していた関東軍はいち早く逃げた。ソビエト軍が入ってくる、その時には、もうモヌケの殻で、関東軍の首脳は日本に帰つて来た。取り残されたのが、開拓民の名前で満州に広がっていた日本人です。その連中が取り残されて、大きな悲劇を引き起こす。自決したり、殺されたり、飢え死にしたりして、まさに「棄民^{きみん}」です。

私は、アメリカ合州国が今やっていることは、「棄民」の運命までふくめてそれと随分に似ているなと思う。

くり返して言いますが、関東軍は一定の中国の東北地方の限られた地域だけで行動する軍隊でした。それが勝手に有事を作つて、また何かあつたら有事だといつて、有事を拡大して行つた。

そのとき、満州はわれわれの生命線だ、とかいろんなことをいつたんですね。われわれは、ここで血を流して闘つたんだとか、居留民がやられているとか、口実をつけて、どんどこ、どんどこ進出して行つた。日本政府はオタオタしながら、それを追認していました。

いくらなんでもこれはひどすぎると怒つたり、実際、関東軍の横暴を抑えるために、東京の中央政府はいろんなことをしたんですけど、もういかんともしがたい。

ついに「関東軍」は、満州軍閥の張作霖を殺し「柳条湖事件」を起こす。それが引き金になって満州国ができる。いや、「関東軍」がでつちあげた。

今アメリカ合州国がやっていることは私はそれだと思う。どんどこどんどこ、あちこちで、本来はアメリカの主権が及ばないところでいろんな事件を引き起こしては、あるいは口実をつけてやっているそれに、日本は、文句は少しはあるだろうが、結局完全について行く。その忠実についていくための法制度を確立していくというのが今問題になっている。有事法制です。

極端な例がアフガニスタンでのアメリカ合州国の戦争にかかわって、インド洋に海上自衛隊の軍艦が、派遣されたことです。後方支援という名目で行なわれたことでしたが、私が思い出したのは、一九三一（昭和六）年に、当時植民地だった朝鮮にいた朝鮮軍が満州に越境、出兵したことです。明治憲法の下でも、これは違法行為でした。天皇の命令なくして、軍隊を動かしてはいけないということが、明治憲法のひとつの根幹です。天皇の命令なしには、出兵できない。それをやったから、出兵は違憲行為です、それを朝鮮軍は平気でやった。

朝鮮軍は、朝鮮は日本の植民地だったから、日本国内の軍なんです。「関東軍」とはちがう。さつきから述べて来ましたように、「関東軍」は中国に主権のある土地で一定の地域のなかでしか動けない軍隊ですが、これがまず地域の外に出て、勝手に動いた。自分で有事をつくって、居留民保護とかまたいろんな名目をつけて動いた。元の地域がお留守になる。お留守になったら、そこでは居留民の保護ができなくなる。その口実で元来が日本国内軍であるはずの朝鮮軍が勝手に越境して、中国に入つた。それは、まさに違憲行為です。当時はそれで大騒ぎになりました。しかし、結局、政府は追従追

認した。誰も罰せられていない。

アメリカ合州国Ⅱ 「関東軍」に追従、追認

今も同じことをやっていると思います。自衛隊の「後方支援」は、あきらかに憲法に違反しています。「平和憲法」の趣旨からもしてはいけないことを、「後方支援」と称して自衛隊の軍艦がインド洋まで出て行く、この憲法に全く反対する行為で、アメリカ合州国Ⅱ「関東軍」に追従、追認していく。この追従、追認を、法整備をして保障していくというのが有事法制です。今それをつくろうとしている。これがいったんできれば、もつとやりやすくなるから、どこどこ、これができる。アメリカは出て行く、日本はついて行く——が完全に出来上がる。アメリカが、たとえばイラクを攻撃するとすれば、日本はついて行く。

これで憲法はずたずたです。本来は軍隊を持つてはいけないのが、予算規模では世界第三、四位にもなる大軍隊を持っているんですが、これでもうほんとうに憲法は「平和憲法」ではない。「戦争憲法」になってしまふ。しかも、「アメリカの戦争憲法」です。

アメリカ合州国によって作られた有事に追認するためには、国内的にも有事体制をつくらなければならぬ。たとえば自由の制限がなされる。あるいは総動員体制ができ上る。そして、情報の管理体制が必要になる。今、げんに言論の自由をおびやかすような法律がつくられようとしています。あるいは、命令を拒否すると、法律違反になって、牢屋に入れられる。

ここででき上るのは、日本という国家の危機のときに政府に従わない、一緒にやらないやつは非国

民だという論理ですね。これはすでに国会の議論のなかで防衛庁長官が言っていた。個人の良心の自由なんて、そんなことは問題にならない。国家の危機には政府といっしょにたたかうのが当然だということを言い出した。

防衛庁で個人情報が集積している、組織ぐるみでもちろん集積している。それが今は問題になっているけれども、今論議されているような法律ができればまったく問題でなくなる。官吏は何をしてもいい、人を調べてもいいことになる。拒否できなくなる。拒否できない体制を作っているのはなんとやと、私が言い出すと、私がつかる。そういうがんじがらめのものがこれからできると思います。これはみな、アメリカの有事から出発しているんです。

ここでまた、私は「関東軍」のことを考えるのです。有事と言うと、なんとなくきれいなことばに聞こえるけれど、実質は戦時体制です。戦時をつくり出したのは「関東軍」。「関東軍」が戦時を日本の国内に持ち込む。戦時にふさわしいようなものを作れ、法制度も社会全体も。これが軍国主義です。日本はそうなつて行った。歴史がそれをよく示しています。

戦時になると、個人の命がなんだ、まず国を守るんだ——になる。こういうかたちで、戦時を平時の社会に持ち込むことが、軍国主義の根幹です。こういう理屈が大規模に、有効にはたらいたのが、日本が戦争に入つて行く過程のなかでした。

軍隊が中心にある社会

戦時体制の社会は軍隊が中心にある社会です。そういう社会をもとにした国が「軍国主義」の国です。

どの国の憲法をみても、わが国の軍隊は、侵略するためにあるとは、どこにも一行も書いていない。自明の論理として、軍隊は自分の国を守るためにあるとしている。しかし、これまでの世界の歴史が示していることは、多くの国が自分の国の防衛と称して、ひとの国を侵略して来たことだ。

そして、国という全体を守るため、個人は犠牲になる、犠牲になっても仕方ないという思想ですね。これが出て来る。国の全体を守るために、人命は犠牲になつていい、いや、犠牲にすべきだ。あるいは、国は個人の戦争はいやだという自由を許さない。

わが国家は存亡の危機の戦時だという理由で侵略する、あるいは、国内的には個人の自由を奪う。そういう国家イコール全体の全体優先主義が強力に形成される。ことに、日本という国は全体が強い国ですね。このことのみきわめが大事だと思うね。個人の自由だとか、そういうことをいうな、今は全体の危機である。日本国が危機にさらされている、市民は黙ってさがれ、という考え方が今の国会の論戦の中ですでに出て来ています、今、防衛庁長官が言っていることは、結局、そういうことじゃないか。

これが、ほんとうに戦時の危機だということになれば、もつと強力に個人の自由を制限する。最後には個人の生命を犠牲にしてもよい、日本国を守るんだつたら、というふうな、事態が進行して行くだろう。私がこういうことを強調しておきたいのは、過去において、日本でまさにそうした事態が進行したからです。そういう歴史を持ったことを忘れてはならない。

「戦争主義」と「平和主義」

まとめ上げて言えば、今、戦時を、「関東軍」ならぬアメリカ合州国が世界のあちこちにつくり出

していて、それに追従するかたちで、日本は戦時体制に相当するような事態を有事法制の名の下にくりつつある。これが、まず、私たち市民がはつきりみきわめておくべきことです。

そのみきわめの上で、現代の戦争というもの、現代の軍隊というものを考えて行く必要がある。今の世界情勢を見て考えることですが、私は二つの原理原則が、対立して、せめぎあっていると思います。ひとつは「戦争主義」、もうひとつは「平和主義」です。

戦争主義は軍国主義ではないし、他国を侵略する侵略主義でもない。現代の戦争は、軍国主義、侵略主義の戦争ではありません。いや、そうでないものとして行なわれて来ている。だから、この戦争は悪い戦争ではない、それどころか正しい戦争——「正義の戦争」だ。だから、これはなすべき、やらなければならない戦争だということになる。

悪い戦争はしてはならない。侵略戦争は悪い戦争だ。軍国主義の拡大していったような戦争は悪い戦争だ。そんな戦争とはちがう、われわれのやっている戦争は。これこそはやるべき戦争、正義の戦争だというのが、今、みなさんの耳にさかんに入って来ている。

それに対して平和主義とは何かというのと、戦争には正義の戦争などはない、戦争は根本的にまちがっているんだ、やるべきではない、べつの平和的、非暴力的手段で問題を解決すべきだというのが平和主義です。

この二つがせめぎあつて来たと思います。

しかし、二〇〇一年「九月一日」の「同時多発テロ事件」以来、平和主義が影をひそめてきて、戦争主義だけが横行して来ている。それが今の情勢です。これはこわいことだ。

昔、「関東軍」は「正義の戦争」を振り回した。今はアメリカ合州国が「正義の戦争」をふりまわしている。

ただ、「関東軍」のやったことは侵略主義です。それが日本に入ってきて、軍国主義になる。

アメリカ合州国はちがう。われわれのやっていることは、侵略主義でも軍国主義でもない、アメリカは主張するでしょう。これは、現代の戦争を問題にするときに前提として考えておくべきことです。

では、アメリカがやっていることは何か。さつきから言ってきた戦争主義——それによる戦争——「正義の戦争」の拡大、強化です。「戦争主義」は私の造語ですが、あるとき英語に訳す必要があったので、いろいろ考えてみたのですが、結局、「ウォーイズム (warism)」にした。「ウォーイズム」は「ミリタリズム」(militarism 軍国主義)ではないし、もちろん、エクспанションイズム (expansionism 侵略主義)とちがう。新しい概念が必要になる。じゃあ、戦争主義とは何か。もちろん戦争は好ましくない。だから、あらゆる平和的手段を使って、戦争をしないようにする。しかし、究極的には武力行使をやむを得ない時にはする。この「やむを得ない」はいつも拡大されるのですが、こういう考え方を、私は戦争主義と呼びます。

国連がそうです。国連憲章をみると、できるかぎり紛争解決は平和的に行けと書いてある。しかし、最後は仕方がないときには、武力行使もする。国連軍というのはそうした考え方に基づいてつくり出される軍隊です。できるだけ平和的に行かなければいけないけれども、武力行使、つまり戦争になっても仕方がない。これが戦争主義ですが、この考え方の前提として、その戦争は正義の戦争、やるべき戦争という証拠がある。これに対して、戦争には、どの戦争にあっても正義はない。戦争はどんな

こと、どんな理由があつてもすべきではない、どんな場合でも武力を用いなくて非暴力で問題を解決する——というのが平和主義です。

二〇〇一年「九月一日」になるまでは、戦争主義と平和主義はせめぎあつてきた。

新しい戦争を考える

今の時代、新しい戦争の概念で、戦争を考える必要があります。

それは、今の戦争を考えるとき、過去の戦争の知識だけで考えてはならないということです。日本について言えば、日本の中国侵略——「日中戦争」に始まってアジア、太平洋地域にまで範囲を拡大して行つた、当時の言い方で言えば「大東亜戦争」——「アジア太平洋戦争」のことを考えるのは必要なことです。その侵略戦争で日本はアジアでたいへんな悪をやつてのけた。その日本の戦争責任を追及することは大事なことです。またその戦争と今の自衛隊とのつながり、今の戦争とのつながりを指摘するのは大事なことです。しかし、やはり原理的にちがうものをもっているものとして、今の戦争をとらえるべきです。原理的にちがうものがあるとして過去の戦争を行なつた日本帝国陸海軍と違うものとして、自衛隊という日本の現代の軍隊は存在しているんだということを、ちゃんと、考えておく必要がある。

その前提のうえで私は話をしています。まず、今の自衛隊を含むところの軍隊、近代的な民主主義国家の、自由を守るといふ民主主義国家のそういうような軍隊のあり方と、昔の軍隊はちがうといふことを考える必要があります。ちがいは、戦争について言えば、これまで述べて来ましたよう

に、ここでの戦争は侵略戦争ではないことです。すくなくとも、そう戦争遂行者は言うでしょうし、たしかにそのことばはまちがっていないかも知れない。そして、戦争を行う軍隊は、昔のようにただ天皇を護るためにある軍隊ではない、この軍隊は近代的な軍隊、民主主義国家、自由を守る軍隊、そう主張している軍隊です。こうした軍隊の祖先はどこにあるか。それはギリシア——古代アテナイにあります。

古代アテナイというのは、それこそ、民主主義発祥の地です。民主主義国家の軍隊のもとになったものが、そこにあつた。そこから考えるのが早いし、またかんじんなことです。ただ、私はここで長々と古代アテナイのことを論じ上げるつもりはない。要点だけ話して行くつもりだが、新聞に書いた私の文章を次に引用しておきます。「アテナイとアメリカ合州国・その酷似」と題した一文です。

古代にあつて、アテナイは強大な国だった。アテナイは民主主義発祥の地、自他ともにゆるすその本場の国だったが、圧倒的に強力な軍事力とこれもまた強力な経済力とで古代世界を支配し、君臨した大帝国であつた。元来、「民主主義」と「帝国」は両立し得ないものだ。しかし、アテナイはその力で強引に二つを結びつけ、支配、君臨をつづけた。

「デロス同盟」は、もともとペルシアのようなギリシア人の世界の外の「敵」に対しての軍事同盟だった。「北大西洋条約機構」||「NATO」にならつて「エーゲ海条約機構」と呼べば判りやすいと提言する学者もいる（私も賛成だが、「NATO」に対して、英語の「エーゲ海」の綴り字を使って言えば、さしずめ「ATO」か）。この軍事同盟の中心にあつてペルシアとたたかつたの

はアテナイだが、勝利のあとアテナイは中心としての位置を強化、拡大して、支配、君臨をさらに大きくたしかにした。

支配、君臨の根拠は、アテナイをその本場とする民主主義、自由だ。二つを大義名分としてふりかざして、支配、君臨に逆らう者をアテナイは叩きつぶしにかかる。民主主義、自由はともに人類普遍の「文明」の原理としてあるはずのものだ。「文明」に逆らうものは「野蛮」であり、それは力をもつてしても排除、叩きつぶさなければならない。この論理、倫理がアテナイの古代世界支配、君臨の根拠、大義名分の基本にある。

ついでに言っておけば、英語の「野蛮人」^{バーバリアン}はギリシア語の「バルバロス」から来ている。ギリシア人に判らぬことばを「バルバル」としゃべる手合いは「野蛮人」に決まっているのだ。今ふうにいえば、英語の判らぬ、アラビア語でしゃべる人間は、それこそ何をしでかすか判らない「野蛮人」だ。そうに決まっている。

こうした「野蛮人」の小国に対して、民主主義、自由をふりかざして、アテナイはあまた戦争をしている。紀元前四九七年から三三八年に至る一五〇年ほどのあいだに、アテナイはスパルタとのあいだの主要な戦争、ペロポネソス戦争以外に小国相手にさかんに戦争をしていて、そうした戦争を四年のあいだに三年していたと主張する人もいる。ついでに言えば、アメリカ合州国も戦後百数十回にわたって海兵隊を出動させて小国相手に戦争をして来た。

アテナイの小国相手の戦争は植民地獲得、収奪のための戦争だった。二つはともにアテナイをゆたかにし、さらに支配、君臨を強化、拡大させた。そして、植民地獲得、収奪にあたってアテナイ

はいくらでも住民を殺し、住民の土地を奪い、空になつた土地にアテナイ人を入植させ、かつて朝鮮、満州に建てた神社のごとくギリシア神殿を建て、朝鮮人に強制した「皇国臣民の誓い」のごとくアテナイに対する忠誠の誓いをたてさせた。あるいは、そのほうが支配、収奪に好都合だとして反民主主義、独裁のカイライ政権までうちたて、支援した。

アテナイの支配、君臨に対して強力に逆らつたのが反民主主義国のスパルタだつた。中絶の一時を除いて二〇年間つづきついにアテナイの敗北に終わつたペロポネソス戦争が、必然の結果として起こつた。両者のあいだのギリシア人の小国を、アテナイは力づくで自分の側につかせた。「中立」は許されなかつた。「今はミロのヴィーナス」の発見地として知られたメロス（「ミロ」は「メロス」のフランス語読み）は「中立」を求めたが、アテナイは軍事力で制圧、成年男子はすべて殺され、女子供は奴隷として売られ、空になつた土地には、アテナイ人の入植者が入つた。

これはおくれた「野蛮国」がやつたことではない。当時もつとも「文明」が進んでいた、そのはずの民主主義、自由の守護神のアテナイがやつたことだ。そのメロス侵略のアテナイ軍には、たしかソクラテスもソポクレスもいた。

私が今、今さらのようにアテナイのことを考えるのは、わが「同盟国」、そのはずのアメリカ合州国がいよいよこの古代の「民主主義帝国」に似て来ているように見えるからだ。そして、かつての「民主主義帝国」下のメロスの住民の運命のことをも考えるからだ。もちろん、アメリカ合州国がメロスの住民の運命を日本に強いるようとしていると考えるのは馬鹿げている。しかし、今、アメリカ合州国がかつての「民主主義帝国」に多くの点で酷似して来ているのも事実だ。日本

はまちがいがなくその事実に向面している。

（『毎日新聞』二〇〇二年二月二六日）

「一極構造」のなかの「アメリカ民主主義帝国」

今引用した一文と、アメリカ合州国は今や「関東軍」の役割を演じているという私がここで書いて来たことをあわせて考えてみて下さい。そうすれば、私が話したいこと、憂えていることが判るにちがいない。もちろん、古代アテナイは軍国主義、侵略主義の国ではなかった。しかし、結局、古代アテナイは当時の彼らにとつての世界すべてを力づくで支配し、利益をむさぼった。アメリカ合州国も同じだ。アメリカ合州国は軍国主義、侵略主義の国ではない。しかし、今、何をしているのか。また、しようとしているのか。しかし、アメリカ合州国は、古代アテナイとちがって、植民地を獲得したわけではない——とおっしゃる人がいるかも知れない。しかし、たとえば、日本に、ドイツに、あるいは、イタリヤ、トルコ、ギリシア、サウジ・アラビアには、広大な米軍基地がある。そこには、その基地のある国の主権は及ばない。その基地のなかでの、一国の運命どころか世界全体の運命を左右する「核」兵器の有無さえ、その国の政府、まして、市民は知らない。知ることができない。

古代アテナイにとつての「野蛮人」は、引用した一文にもう少し加えて言うと、まず、はじめは巨大なペルシア帝国でした。その巨大な「野蛮人」はギリシアを侵略、支配しようとした。アテナイが中心となってデロス同盟の名の下にギリシアはたたかい、侵略を撃退、そのあと民主主義と自由のゆ

るぎのない守護者としてのアテナイの覇権はゆるぎのないものになるのですが、ついこのあいだまでのアメリカ合州国にとつての巨大な「野蛮人」はソビエトでした。その巨大な「野蛮人」は自らを中心として「社会主義世界」をかたちづくつて、その巨大な軍事力で民主主義と自由の守護者アメリカ合州国を中心とする「自由主義Ⅱ資本主義世界」に今に襲いかかろうとしている——この前提の下にアメリカ合州国を中心として「自由主義Ⅱ資本主義世界」も、また広大な軍事力をつくり上げて、対峙する。これが第二次大戦の戦後、一九八九年の「ベルリンの壁」崩壊に至るまで世界にあつて、世界をがんにがらめに縛りつけてきた「東西」対決の「冷戦」構造ですが、これは、親玉のソビエト自体をふくめて、「社会主義世界」の「自滅」ということば以外に言いようのないかたちでの終り方で消滅した。

「社会主義世界」だけが消滅したわけではありません。戦後このかた、世界は「自由主義Ⅱ資本主義世界」「社会主義世界」に加えて「第三世界」（は、つまり、「途上国」の世界ですが、「途上国」はただひたすら「先進国」へむかつてそうなることを目標にして動く、動こうとするまさに「途上」の国であるのに対して、「第三世界」は侵略と植民地支配と収奪を長年やって来て、自分のゆたかさを築き上げた「先進国」のそのありように根本的疑問をもつて、新しい国づくり、世界づくりをやるうとしたのが「第三世界」です。そのことをここで明確にとらえておきたい）の「三極構造」でやって来たのだが、「社会主義世界」の崩壊は、それによって理念においても現実の政治、経済での支援、援助においても大いに支えられて来た「第三世界」の崩壊をも招来しました。つまり、これで「三極構造」は消え、あとはアメリカ合州国をその中心とする「自由主義Ⅱ資本主義世界」の「一極構造」の世界となつて来

ています。この「一極構造」の世界にあつては、圧倒的な強大な軍事力をもつアメリカ合州国がいやが上にも中心になって来ていて、アメリカ合州国は今たしかに古代世界における「アテナイ民主主義帝国」さながらの現代世界における「アメリカ民主主義帝国」です。

巨大な「野蛮人」ペルシアの侵略を撃退したあと、「アテナイ民主主義帝国」に対する「野蛮人」は、理由のいかんにかかわらず、自分に歯むかつて来る「小国」でしたが、現代の「アメリカ民主主義帝国」に対する「野蛮人」は、アメリカ合州国の政策に反対するすべての勢力です。そのきわめつけが、二〇〇一年「九月一日」にニューヨークの「世界貿易センター」ビルに「自爆攻撃」をかけて来た「テロリスト」でした。それに始まって、そのあとは、誰であれ彼であれ、合州国がそう認定する「テロリスト」と、彼らを支持する国家なり集団なりと、アメリカ合州国が認定する勢力がことごとく撃滅して行かなければならない「野蛮人」です。

まったく古代アテナイ、現代アメリカ合州国、二つの「民主主義帝国」はよく似ています。ことに、どちらもが、ペルシア、ソビエトという巨大な「野蛮人」を退治して自分のひとり天下になったあと、理由のいかんを問わず、また根拠のあるなしを無視して、自分の意にそぐわないのはすべて「野蛮人」とみなして、やつつけにかかることにおいて、それはまったく似ています。しかし、二つのあいだのちがいが大事です。これを少し見て行きたい。

どちらもが「文明」の名において「野蛮人」をやつつける「正義の戦争」をやる、あるいは、やろうとするのですが、その戦争の破壊力において、二つは決定的なちがいをもちます。戦争は究極のところ、人を殺すことだが（アメリカ合州国海兵隊は新兵訓練で「殺せ、殺せ」と叫びさせながら新

兵を訓練する)、古代アテナイの「正義の戦争」で殺す人間の数は、なにしろ槍とか刀とかで殺すのですから、現代の戦争にくらべると、はるかに数少ない。しかし、現代の戦争では——ことに世界最新の武器をそなえた世界最大の軍勢力をもつアメリカ合州国が行なう戦争となると、そこにはたしか一輛で二個師団の軍勢力、破壊力に相当する重戦車やら、アフガニスタンでの戦争でところかまわずぶち込んだミサイルやら、一回の爆発でベトナム戦争時において半径五百メートル以内の酸素を消滅させる「地震爆弾」、無数に小型の砲弾を撒き散らすボール爆弾、無限に核兵器に近い破壊力と放射能汚染力をもつ劣化ウラン弾、そして、最後にはもちろん、「核」兵器を使つての戦争だ。その破壊力、殺戮力は計り知れない。

「二十世紀」の戦争

イギリスの歴史家エリック・ホブスバウムの『極端な世紀』と題した、そして「この短かい二十世紀 一九一四—一九九一」という副題をもった二十世紀を書いた歴史書があります。その冒頭に、「二人が二十世紀を見る」という題名の下に、音楽家やら科学者やら作家やら西洋のいろんな領域で傑出した「十二人」の「二十世紀観」が列挙してあるのですが、大半が、「戦争と殺戮の世紀」だと見えています。結果として、二十世紀は「西洋の歴史のなかでもっとも恐るべき世紀」、いや、「人間の歴史のなかでもっとも狂暴な世紀」——そういうことになっています。

戦争はすべて古代の戦争ではなくて、現代の戦争です。殺戮も、現代の戦争がひき起こす殺戮だ。では、二十世紀になって戦争で、それがひき起こした殺戮でいつたい何人の人間が死んだか、いや、

殺されたか。

いろいろな数字があります。かつてのアメリカ合州国でカーターが大統領だったときに大統領特別補佐官を勤めたブレジンスキーが算定したのは、私には、これがいちばん信頼できる数字だと思われるのですが、戦争による殺戮の死者が八千七百万人、「アウシュビッツ」のような収容所で殺されたのが八千万人、合計して一億六千七百万人が死んだ。いや、殺された。

そして、ここでもうひとつ考えておかなければならないことがある。それは、現代の戦争で殺された人間には、民間人が圧倒的に多いことです。しかも、第一次世界大戦では民間人の死者の比率が全体の五パーセントだったのが（これは少し低すぎる）、第二次世界大戦では四八パーセント、朝鮮戦争では八四パーセントと上昇して、ベトナム戦争となると九五パーセント、さらにはユーゴスラビアに対するNATO（北大西洋条約機構）軍の空襲となると、いや、さらにアフガニスタンでのアメリカ合州国の「正義の戦争」となると、ほとんど百パーセントが「民間人」で、兵士はほとんど死んでいない。昔はよく兵士はあまた死んでも將軍は死なない——「一将功なつて万骨枯る」と言われたものだが、これだと、市民はあまた死んでも兵士は死なない、「万兵生きて、万民死す」だ、これでは。

古代アテナイにあつては、特定の戦争に反対する人はあつても、戦争そのものを「正義の戦争はない」として否定する人は少なかったようです。有名な人の例をあげて言えば、アテナイとスパルタのあいだの無益な戦争を強烈に批判した大喜劇作家アリストパネスですが（彼の『女の平和』を読んでみたまえ。ペロポネソス戦争に対するユカイで強烈な批判がそこに出ている）。彼の場合でも、どうやら戦争全体を否定しているのではなさそうです。しかし、それでも、そこに見られる「反戦」は、

戦争全体を否定する力をもっています。

戦争には正義はないとして、戦争、軍備をまるごと否定する思想が昔からなかったわけではありません。あつたのは、主として宗教的理由に基づくもので、たとえば、「クエーカー」の平和主義がそうだ。「クエーカー」であるということ、第二次大戦のあいだでも、アメリカ合州国政府は、彼らの「人殺しの銃をとらない権利」に基く「良心的兵役拒否」を認めた。^{ネイティブ・アメリカン}「先住アメリカ人」（アメリカ合州国の「インディアン」のことだ。今は「インディアン」と言わない）のホピ族の「ホピ」は平和という意味だが、戦争しないという彼らの伝統に基いて、彼らもまた、「良心的兵役拒否」の道をとろうとしたが、「インディアン」というような「野蛮人」は人間なみに取り扱ってもらえない当時のことです。アメリカ合州国政府は「クエーカー」に認めたその権利をホピ族の若者には認めず、彼らを牢獄にぶち込んだ。

「平和主義」が、宗教的理由に限らず、それ自体の思想として世界で認められるようになったのには、おおよそ、二つの理由がある。まず、ひとつは、今さき述べたように武器の発達によって、あまりにも殺戮と破壊が大きくなったからです。これだけの破壊と殺戮をやつていくさに勝つたところで、それが勝つことになるのか。この反省が第二次大戦後ようやく世界に大きくひろがって、「平和主義」が「戦争主義」に負けないほど重要な、そう人びとによってみなされる思想になった。ここでもう一度、あらためて、ここで「戦争主義」と言つても決して軍国主義や侵略主義ではないと言つておきます。それまでは「平和主義」は決してふつう一般の考え方ではなかった。一部の宗教がらみの狂信的な平和主義者が信奉するだけの思想だった。これが第二次大戦後になってようやく「戦争主義」と並

ぶ狂信的でない、ふつうの思想、原理になった。他の国とちがつて、「正義の戦争はない」とする「平和主義」の憲法——「平和憲法」をもつ日本の人間は、こここのところの認識が逆になっているのではないかと思います。くり返して言っておきたい。「平和主義」はあたりまえのこととして認められて来たものではない。「戦争主義」があたりまえのことでした。そのあたりまえの常識をくつがえして、どうもこちらのほうが正しいのではないかと、宗教的に強烈な人たちだけではなく、ふつうの人が考え出したのは第二次世界大戦後のことです。

それには、武器の進歩とともに戦争があまりに巨大な殺戮と破壊をとまなうようになったことと並んで、もうひとつ、戦争はいくら繰り返されても終わらない、戦争は戦争を生むだけのことだという事実が多くの人に納得できるようになったことがあります。

戦争は、いつでも平和を前提として行なわれるものです。この戦争さえ終れば、あとは、平和な世界が来るというふうには、です。あるいは、平和確立のためにこそ、この戦争は必要だ、やらなければならぬというふうには、です。

このもつともみごとな例が、われわれの日本がやってのけた戦争でした。私の子供のころ、日本は中国に対して侵略戦争をやっていたのですが、そのころ私がくり返して聞かされたのは、この戦争は「東洋平和」確立のための戦争だという理屈です。しかし、平和はなかなか来なかった。それどころか戦争は大きく拡大して「大東亜戦争」になった。さんざん戦争をやったあと、ようやく平和は来ましたが、それは日本が戦争に負けたからであって、勝ったからではない。

世界の歴史はこういうマヤカシに満ちています。そこへもつて来て、戦争はあまりにも多くの犠牲

を生み出した。それが極限に達したのが、第二次世界大戦でした。第二次世界大戦のあと、戦争に対する疑念が増大、世界中にひろがったといえます。この疑念は、一步を進めれば、戦争、軍備の全面否定、戦争には正義はないとする「平和主義」になる。日本の戦後の憲法——「平和憲法」がその具体例ですが、ドイツその他西ヨーロッパ諸国で今や法制度として存在して来ている「良心的兵役拒否」、そして、実際にその年齢の若者がその制度に従って「良心的兵役拒否者」となって「兵役」、いや、「軍事的奉仕活動」に従事することを拒んで、「市民的奉仕活動」を行ないつつある事実（ドイツの場合、すでにその数は軍隊に入った「軍事的奉仕活動」者数を上まわっている）にも、戦争に対する疑念の増大、世界へのひろがり結びついています。

「現代の民主主義国家」の軍隊

ここで軍隊の問題を考えてみたい。私がここで考えたいのは、「現代の民主主義国家」の軍隊の問題です。そうわざわざ書くのは、この「現代の民主主義国家」の軍隊は、軍隊と言うと、若い世代までふくめて日本人のたいていが考える日本の敗戦に至るまでの軍隊——日清、日露戦争、日中戦争、そして、「大東亜戦争」を行なった大日本帝国の、「帝国憲法」下の軍隊と根本的にちがった。そのはずの軍隊としてあるからです。日本の今の自衛隊は、まさにそうした「現代の民主主義国家」の軍隊——そうであるはずの軍隊です。

「大日本帝国」の軍隊の本質は、「軍人勅諭」（正式には「軍人に賜はりたる勅諭」）が、明確に示してくれています。「我国の軍隊は世々天皇の統率し給ふ所にそある」から始まる「軍人勅諭」は一八

八二年（「明治」一五年）に発布されたあと、兵舎のなかで兵士たちはたえず暗誦を強制された「勅諭」です（兵士ばかりではありませんでした。学校でも、よく暗誦させられたものでした。旧制中学校の入学試験にも「軍人勅諭」にかかわつての問題がよく出されていた）。そこに述べられていることは、大日本帝国の軍隊は、要するに、天皇の家来としてある軍隊であるということでした。今引用した冒頭の一行がすでにそのありようを示していますが、さらに鮮烈なことはこうです。「朕は汝等軍人の大元帥なるそされは朕は汝等を股肱ここうと頼み汝等は朕を頭首と仰きてそ其親は特に深かるべき朕か国家を保護して上天の恵に応し祖宗の恩に報いまぬらす事を得るも得ざるも汝等軍人が其職を尽すと尽くさざるとに由るそかし」。ここには、大日本帝国の軍隊が天皇の家来であり、天皇がそのカシラであることは明快に出ています。もうひとつ明らかにされていることがあって、日本国家は「朕」、すなわち、天皇の持ちものであることです。この天皇の持ちものである日本国家が興隆するもしないも、おまえら、股肱の臣である軍人の働きいかによるといわけですが、ここには、国民の姿はどこにもない。まして、ひとりひとりそれぞれが自由な意思をもつて対等、平等に生きて行こうとする市民の姿など、この天皇の持ちものである日本国家にあるはずはない。

「現代の民主主義国家」の軍隊はこんなものではない。あつてはならない。では、どんなものが、どんなものとして、あり得るのか、あり得ているのか。

ここで話は、また、民主主義の元祖、古代アテナイに戻ります。古代アテナイは民主主義の元祖であるとともに、彼らの民主主義を護る、そうとしてある、そうとしてあるはずの「現代の民主主義国家」の軍隊（自衛隊がそうです。そうであるはずです）の元祖であるからです。

私はすでにこの本のなかで民主主義の元祖古代アテナイがいかにその大義名分の下で当時の世界で戦争、侵略、支配をやって来たか、その戦争、侵略、支配を通して、本来は両立するはずもない一大「民主主義帝国」を築き上げたか、そこにおいて、いかに、アメリカ合州国がこれもまた一大「民主主義帝国」を形成しつつあるかを示して来ましたが、両者ともにそれらすべてのものとなる軍勢力、さらにそのものとなる軍隊がいかなるものとしてあつたか、また、あるかをここで根本的に見て行きたいと考えます。

古代アテナイの場合、これはアメリカ合州国と同じですが、いや、基本において、「現代の民主主義国家」すべてが同じですが、基本は、まず、民主主義、自由を「国是」とするわが民主主義国家を今、攻撃して来て叩きつぶそうとする外敵がいる。これはわが民主主義と自由という「文明」を叩きつぶしにかかっているがゆえにまさに「野蠻」の輩やかただが、さて、この「野蠻」の輩にいかに対し、彼らを撃退するか。武力で相手はやって来ているのだから、もちろん、彼らに対し、撃退し得るものは究極的には武力、軍勢力、つまり、軍隊しかない。

しかし、この軍隊は誰がいかなるものとしてつくるのか、つくっているのか。王様の国であるなら、大日本帝国の軍隊が、天皇の家来、股肱の臣の軍人の軍隊であつたと同様、王様の家来、股肱の臣の軍人の軍隊があるのにちがいありませんから、話は簡単です。もちろん、その王様の家来、股肱の臣の軍隊では、今、外敵の攻撃に対して小さすぎるものであるかも知れない。じゃあ、召集令状を発して、民間人を軍人に仕立てあげるがよろしいというようなことは、元来、世界のいろんなところのいろんな国でいつもやって来たことです。いや、もうひとつ言っておこう。その防衛の名目で、「戦時」

を自らが形成して巨大な軍隊をつくり上げて、自らの戦争、侵略に乗り出す——これも世界の歴史に
あまた事例があることだ。

古代アテナイには、王様や天皇の家来、股肱の臣の軍人の軍隊はありませんでした。外国人の傭兵
はいましたが（海軍の軍船の漕ぎ手の多くは外国人でした）、主力は自らが槍をとつてたたかう。そ
のかたちで「軍事的奉仕活動」を行なう「市民」でした。この軍隊のありようが大事なものは、それが
そのまま「現代の民主主義国家」の軍隊のありように通じるものとしてあるからです。

古代アテナイの直接民主主義Ⅱデモクラティア

日本で兵士となつて軍隊に入ることは、ふつう「兵役」につくと言います。「兵役」という言い方には、
どこかしら「苦役」の意味あい、ひびきがつきまといつて、これは、王様、天皇の家来、股肱の臣
の軍人、軍隊にふさわしい言い方であっても、自らの民主主義、自由を護る、護ろうとする、すくな
くともそのはずのことになっている古代アテナイや、その後裔の「現代の民主主義国家」の兵士にふ
さわしい言い方ではありません。彼らには、私がすでに「良心的兵役拒否」の問題にかかわつて言及
して来た「軍事的奉仕活動」、英語で言うなら、「ミリタリー・サービス」がふさわしい言い方です。
う。その「軍事的奉仕活動」を自らの正義、国家のために行なう兵士——それが古代アテナイ、また、
「現代の民主主義国家」の兵士です。

ここで想起してもらいたいのは、まず、古代アテナイが民主主義と自由を自らの生き方の基本とす
る市民がかたちづくる「市民国家」であつたことです。ギリシア語で言うなら「ポリス」です。

と私が言うと、「ああ、都市国家か」と合点されてしまう人は多いかと思えます。たいていの歴史書にも歴史の教科書にもその訳語が出ているにちがいませんが、私に言わせれば、それは誤訳です。正しい訳語は「市民国家」だ。

「都市国家」という誤訳は、ただ、「都市」という場所と外形にとらわれた用語で、市民を主体とした政治体制——それをギリシアでは「デモクラティア」と言い、その「デモクラティア」をもった国家を「ポリス」と言ったのですが、「都市国家」ではその「ポリス」の意味は出てきません。それは「市民国家」と言うべきものです。そして、もうひとつ大事なことは、「市民国家」に住んでいるから、住民は「市民」となるのではないことです。「市民」とは何か、誰か、については、この本のあととところで述べるつもりですが、ここでとりあえず言っておきたいのは、「市民」——民主主義と自由を自分の生き方の基本においている「市民」（「市民」とはそういう存在です。そういう人間存在としてあるからこそ「市民」です）が集まって形成、維持しているのが「市民国家」であることです。ただの場所、外形の問題ではありません。

「市民」が集まって「市民国家」を形成し維持するためには、「市民」の「奉仕活動」が必要です。「現代の民主主義国家」ととってもこうした「市民」の「奉仕活動」は必要なことで、たとえば、もつともかんじんなこととして税金を出して中央政府から地方自治体政治に至るまでの政府を形成・維持し、学校をつくり、鉄道、道路を建設、整備させ、そのためにまた役人、政治家に税金をやつて彼らに仕事をさせ、さらには軍隊を形成、維持し、そしてまた、いつたいこの私の一票はなんの役に立つのかとボヤきながら議会の選挙に投票をしている（日本人は、この選挙での投票が「市民」の権利である

とともに義務としての「奉仕活動」であると考えていませんが、オーストラリアでは「棄権」は「犯罪」です。そうみなされて、罰が課せられる）——というぐあいに「市民」は「奉仕活動」をしているのですが、古代アテナイは役人も代議士も専門の裁判官もない直接民主主義の政体をもった、文字通りの「デモクラティア」の「市民国家」です。「市民」の「奉仕活動」がなかったなら、「デモクラティア」も「市民国家」も成立しません。

ここで念のために言っておきたいのですが、この「デモクラティア」という直接民主主義政体には、女性が入っていませんし、奴隷は、もちろん、入っていない。ただ、その問題を私はここではとやかく論じ上げて、だから、古代アテナイの民主主義はインチキだと言うつもりはありません。そういえばその通りで、彼らの「デモクラティア」は、女性、奴隷の政治参加、参政権のない不完全な民主主義政体でした。ついでのことに言えば、外国人は商売することはできても（奴隷も商売の権利、自由をもっていました。ここらは後年のアメリカ合州国の奴隷とまったくちがっていました）政治参加はできませんでした。そして、税金はガツポリ取られていた。それでも、商売の自由、社会における自由な空気を求めて（二つの自由は結びついています。社会主義国は、長年、自由のない社会をつくり上げて来て、経済が行きづまって来ると慌てて商売の領域においての自由を許したのですが、社会全体が自由になっていなかったのですから、その政策はうまく行かなかった。商売の自由は人間全体の自由の一部で、それが言論の自由、政治参加の自由と切り離し得ないものであることは、社会主義国家の政治家には判っていないかったです）外国からあまた商人、商人志望者が集まって来て、アテナイの富と繁栄をつくり出した。

こんなふうを書いて行くと、古代アテナイはなんとおくれた、そして、やらざるばかりの「市民国家」であつたかと言われそうですが、では、「現代の民主主義国家」の日本で、たとえば、在日韓国人、朝鮮人はたしかに金儲けの自由はもっているが、しかし、税金はしこたま取られ、そして、参政権はまったくない。そして、全体の政治のありよう、日本もアメリカ合州国もドイツも、その他ありとあらゆる「現代の民主主義国家」も、そこはごく小部分の例外を除けば「間接民主主義」の政体の国家であつて、つまるところ、政治への参加は税金を出すことと、たまさかの選挙にこれがいったいなんの結果を生み出すのか定かならぬままに一票を投じることぐらいしかない。

このありさまを見ていると、古代アテナイの「デモクラティア」がおくれたものであつたと言えるかという気がして来ます。「人のふり見てわがふり直せ」という昔からの言い伝えがある。古代アテナイの「デモクラティア」にあれこれ文句をつけるより、そこから学びとるべきものは学びとつて、わが「現代の民主主義国家」のまぎれもないひとつの、そのはずの日本の政治を少しはまともなものにしたほうがよいでしょう。これは逆にも言えることで、古代アテナイにいただけなものとしてあつたものは、コンリンザイいただかないで、そうすることで、わが現代日本の民主主義政体——「デモクラティア」をましなものにする——これも必要なことです。たとえば、すでに書いて来た、一大「民主主義帝国」としての古代アテナイのありよう、これは今や世界に一大「民主主義帝国」として君臨するアメリカ合州国のありよう同様いただけのものではない。これはまったくの「反面教師」です。そのつもりで、私は、今、このくだけりを書いている。

つづきは製品版でお読みください。